



Organization for Clinical Rehabilitation with Advanced Science and Effective Education

発行：NPO 法人 リハビリテーション医療推進機構 CRASEED / 年3回発行 / 第18号 (2011年9月12日発行)
〒560-0054 大阪府豊中市桜の町3-11-1 関西リハビリテーション病院内 TEL 06-6857-9640 URL : www.craseed.org

震災からの“リハビリテーション”

～東日本大震災・現地からのつぶやき～

私が勤務する宮城厚生協会 坂総合病院は、宮城県仙台市街地から電車で約30分、塩釜市を中心とする二市三町（多賀城市・七ヶ浜町・利府町・松島町）と仙台市東部地域を合わせて人口25万の地域を診療圏とする、許可病床357床（回復期リハ46床含む）を有する地域の中核病院です。病院建物は幸いにも津波被害を免れましたが、診療圏の沿岸地域では多数の死傷者が発生し、多くの住民が住み慣れた自宅を失いました。避難生活を余儀なくされ、家族を失い、職も失い、希望のみえない困窮した生活を送っている方々も少なくありません。病院職員も自身が被災者となり苦しい生活を強いられる中、全国の仲間の協力を頂きながら、一人ひとりが自分達の使命を持って地域の支援活動に取り組んできました。今回は、その一端を皆様にご紹介したいと思います。

*

●急性期医療支援…当院は2008年4月に「宮城県災害拠点病院」の指定を受けていました。日頃より全職員による大規模災害訓練を実施しており、本年2月にも机上訓練を実施したばかりでした。今回も震災発生直後からマニュアルに沿って直ちに対策本部を立ち上げ、その指示でトリアージ診療を開始、被災者への医療提供を行うことができました。私自身は当日震災直後よりトリアージ「イエローブース」の陣頭指揮を支持され、絶え間なく運び込まれる患者の診療に従事しました。横殴りの雪が降りしきる外を見ながら過ごしたあの夜（実際にはあまりそんな暇はなかったのですが…）は、今でも忘れられません。トリアージ診療は震災から12日間継続され、延べ約2500名の患者の診療を行っています。

●避難所医療支援…病院での医療支援と並行して、震災2日後の13日より塩釜市・多賀城市を中心とした避難所医療支援を行いました。幸いにも全国からの人的・物的支援を頂いたこともあり、複数の医療チーム体制を整備可能でした。当初の避難所では、食物配給は不十分なことに加え劣悪な衛生環境から、感染症が蔓延し体調不良の訴えも続発。支援チームは、衛生環境整備のための指導とともに一人ひとりの声かけと診察を継続し、3月中で延べ約4300人の診察を行っています。

●院内リハ部門…当院リハスタッフ達は、震災直後から院内での患者の移送介助や伝令役・事務業務補助など、様々な部署でその役割を果たしてくれました。交通手段の寸断から通勤さえできないスタッフもいる中、昼夜交替でその任務にあたっていました。しかし、それは「リハ専門職」の役割とはやや異なります。震災の中でも「リハ専門職」としての役割を果たしてもらうべく本部に配置換えを要望。震災4日後の15日より回復期リハ対象者や廃用悪化の危険性の高い方を優先して、部分的ながらも「リハ医療」を再開しました。その当時の、患者さんやリハスタッフ達の生き生きとした表情が印象的でした。

●避難所リハ支援…4月上旬、私達は「避難所リハ支援」を本格的に開始しました。避難所に滞る障害者・虚弱高齢者を対象とした生活環境整備といわゆる「生活不活発病」の予防を主な目的にしました。当院スタッフのみでは対応不十分であったため、既に別個で介入を開始していた宮城県理学療法士会スタッフと連携をつくり、定期的な会合を開催。独自のカルテを作成して、円滑な運用と情報共有に努め



ました。リハ科医と当院リハスタッフで避難所を定期的に巡回して問題例をピックアップし、対象者には県士会スタッフによる個別リハを提供するというシステムを確立しました。補助具支給や入浴介助、地域介護サービスへの橋渡しや生活指導など、様々な場面でそのニーズに応える努力を継続しています。

**

今回の震災は、被災地域の特徴ゆえの困難さに直面しています。岩手・宮城・福島沿岸部を中心として広範囲に渡ることで、農業・漁業といった一次産業に支えられた生活圏が多いこと、高齢者率が高く医療過疎地域が多いことなど。生活支援の基盤となる安定した物資供給や医療提供の遅滞、主産業復興へ向けた障壁、地域の“絆”の崩壊など、今後も様々な問題を抱えつつ前に進んでいくことを求められています。医療・生活両面におけるニーズも、刻一刻と変化していくことが予想されます。多角的かつ長期的な展望に立った継続的な支援が必要です。皆様からの温かい声と支援を受けながら、地域住民の“QOL”回復・向上のため、現地の「リハ専門職」としての取り組みと情報発信を継続していきます。

（文責：宮城厚生協会坂総合病院
リハビリテーション科 藤原 大）

リハビリテーション科専門医試験に合格して

★細見 雅史 先生★

私は、現職に就くまでは、主に神経内科・老年内科医として医療に従事してきました。これらの臨床の場においてリハ医療に関わる機会はありませんでしたが、2008年4月より兵庫医科大学リハ部にて本格的にリハの勉強を開始しました。最初はリハ科医が何をすればいいのか分からず、とまどいもありましたが、日々の臨床やセミナーなどを通じて徐々にリハ科医的な考え方が身につくにつれ、どうにか専門医試験に合格できました。専門医試験勉強では、日々の診療で得た知識を再度整理し、不足している知識を補うよい機会になったと思います。今回の試験合格後も、まだまだ不足する知識を補うために、あるいは日々進歩する医学についていくためにも新たな知識を構築し続けることが必要です。今後ともさらに、幅広く学んでいく姿勢を大事にしていきたいと思っています。

(兵庫医科大学リハビリテーション部)

★田中 奈央子 先生★

みなさまにご心配をおかけしながら、どうにか専門医試験に合格することができました。道免先生をはじめ、CRASEEDの皆様いろいろなご指導いただき、また一緒に勉強できる仲間がいて、このような環境にいることに感謝でいっぱいです。加えて今まで不足していた知識や経験を認識し学習するよい機会となりました。今後もリハビリテーションを必要とされている患者さんに真心ある医療を提供できるよう努力を重ねて参りたいと思います。引き続きご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお祈りします。

(医療法人明倫会宮地病院
リハビリテーション科)



★藤原 大 先生★

2009年6月～2010年12月の1年7カ月にわたり、兵庫医科大学リハ部で研修させていただきました。専門医試験受験にあたり、道免先生や児玉先生をはじめ多くの関係者の方々にご指導いただき、感謝申し上げます。専門医試験の翌週に地元宮城で東日本大震災により被災し、合格通知の到着も大幅に遅れましたが(笑)、早速リハ科専門医としての大きな課題に直面しています。

現在は、宮城県塩釜市にある(病床数357床)において、回復期リハ病棟(46床)の運営とともに、急性期リハ充実と地域リハ推進に取り組んでいます。今後も地方の地域基幹病院に従事するリハ科専門医として、あらゆる時期・場所において、地域住民に寄り添うリハ医療の継続・発展のために邁進していきます。遠方にはなりますが、今後ともご指導のほどお願いいたします。

(宮城厚生協会坂総合病院
リハビリテーション科)

リハビリテーション 関連職種紹介

16

医療情報の電子化が進む中、医事課を取り巻く環境は、昔と今ではずいぶん変わってきました。一昔前は、受付・会計・レセプト(診療報酬の計算)が主な役割でしたが、現在では従来の役割に加え、経営資料・統計資料の作成(単なる資料ではなく、医療機関の方向性まで示唆したオーダーメイドの分析資料)も提出できることが要求されています。

医事課の役割が変われば、当然医事課スタッフの業務内容も変わってきます。医事課の仕事はこれまで一体の組織としてみられていましたが、電子化が進んできた現在“診療情報管理士”のような診療情報に関する専門部門、

医療事務

受付・会計などのサービス部門、医療スタッフの仕事を支える事務面でサポートするクラーク業務といった大きく3つに業務分化されつつあります。当然、医事課スタッフのスキルアップ(より高い医療知識と、サービス追及への姿勢)は不可欠であり、それを支援する環境整備も今後ますます重要であると感じています。

医事課には様々なデータが集まってきます。収集したデータ等を分析し、資料として各部署に提供(情報共有)できる情報発信基地としての役割を担えるよう、また、医療者側から出たアイデアに対し、それを受け止め判断できる能力とその先の段取りをつける役割を担えるよう日々努力しています。

その他、当院医事課では前方連携の役割も担っています。当院は、全病棟

が回復期リハビリ病棟であるため、患者の入院経路は急性期病院からの紹介のみとなっています。また、ここ数年で回復期リハビリ病棟を有する医療機関が飛躍的に増えたため、選ばれる医療機関となる努力が必要です。そのため5年ほど前から急性期病院への訪問活動を開始し、顔の見える繋がりを築いてきました。医療者は回復期リハビリの専門病院としての責任や誇りを持って診療しています。診療に携われない医事課はそれを伝える役目として、今後も訪問活動を継続していこうと考えています。

今後ともよろしくお祈りいたします。

(西宮協立リハビリテーション病院
藤田博徳)